九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

元・兪和『孔子聖蹟図』賛を踏襲した明・張楷『孔子聖蹟図』賛について

竹村, 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 中国文学

https://doi.org/10.15017/16866

出版情報：文學研究. 107, pp.37-68, 2010-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

元・俞和『孔子聖蹟図』賛を踏襲した明・張楷『孔子聖蹟図』賛について

竹村則行

一　はじめに

明代初中期の中国に生きた張楷（一三九八―一四六〇）の名前を、中国文学史や明代文学史上に見ることはまず無い。今日に伝わる張楷の詩作として、銭謙益『列朝詩集』乙集第五に十首、朱彝尊『明詩綜』巻十八下に三首、陳田『明詩紀事』乙籤巻十一に二首等を輯録するが、これらは恐らく多作として知られる彼の全詩業の一斑でしかない。また、張楷が名作『西廂記』の各場面を七律百四十首に詠んだ『蒲東崔張珠玉詩集』も今日に伝わるが、四百年後の清代康熙の文人何子春が「張楷何人也」と慨嘆するほど、その名前は後世に知られていなかった。後述するように、永楽二十二年（一四二四）、二十七歳で科挙試に合格して進士となった張楷は、陝西按察使僉事や都察院右僉都御史等、当時の士大夫が歩むべき官歴を順調に踏んでおり（最後は弾劾を受けて免職になったが）、その

ことは、彼に関わる当時の文人が記録した各種の墓誌銘等から裏付けられる。しかし、彼は『明史』や明代文学史に記録される程の著名な存在ではなく、その他の数多くの文人同様、今日忘却された無名の文人の一人に数えられる。

しかしながら、後世の評価の如何に関わらず、張楷が明代の中国に生きた文人であることは確かであり、例え全著作でなくても彼の文学活動の一部が今日に伝えられていることも重要な事実である。それらの断片的な資料から、張楷が当時の明代文壇の息吹を如実に伝える、極めて典型的な文人であったことは十分に立証できる。言い方を変えれば、通常の明初文人としての張楷の文学活動のありようから、明初文壇の趨勢を逆に探索することは十分に可能であるし、そのような視点からの文学史研究も必要であると筆者は考えるのである。

拙稿は、以上の観点に立ち、図賛という体裁で奇しくも作品の大半が今日に伝えられる張楷の『孔子聖蹟図』（孔子絵伝）に付した図賛を研究の対象として取り上げ、先行する元・兪和の『孔子聖蹟図』賛と比較検討しながら、その踏襲の仕方について分析しつつ、翻って明代文学のあり方について考察することを目的とするものである。

二　『孔子聖蹟図』の出版と研究の簡史（中国・日本）

『孔子聖蹟図』（孔子聖迹図、聖跡図、聖績図等とも）とは、〝聖人〟孔子の生涯の事蹟を一連の絵と文、賛で綴った〝孔子絵伝〟を言う。孔子生涯の記念すべき場面を描いた絵の数は、管見の限り十幅から百幅を越えるものまで多数あり、また絵と共に図賛や小文を伴うものもあって、絵の大きさも含めて多種多様を極める。しかし、いずれも等しく〝聖人〟孔子を顕彰する点では共通する。漢代以降に国教化された儒教において、その開祖たる孔子が一

貫して文人の尊崇の対象、教学の模範であったことは言うまでもないが、特に明代以降は多様の『孔子聖蹟図』が制作されるようになる。その理由として、当時における儒教崇拝や科挙受験の趨勢、更に近世の印刷出版の発展等の背景が挙げられる。

この『孔子聖蹟図』の主体は図絵であり、そこに附せられた図賛や小文は絵図を引き立てる為の脇役である。文字は時間を超えて容易に後世に伝承するが、原物が限定される絵図となると、印刷や電子技術が進んだ今日ならばともかく、古代においては原物が（模写も含めて）後世に伝承することは稀であった。有名な晋・顧愷之の『女史箴図』（大英博物館蔵）が、例え唐代の模本としても今日に伝存するのは極めて稀有の事例である一方、晋・張華の「女史箴」（『文選』巻五十六所収）文がほぼ完璧に今日に伝わるのはその好例である。『孔子聖蹟図』の濫觴についても、絵図の伝承問題もあって特定が困難であるが、拙稿では、調査し得た限りの知見として、元・王振鵬画／兪和題による『聖蹟図』十幅を今日に伝存する最も初期のものとして考察を進めることにする。

以下、論述に先立ち、拙稿の論述に関わる『孔子聖蹟図』の主要版本、及び関連図書についての簡単な書誌を確認しておく（今日の連環画類は原則として省く）。

『孔子聖蹟図』主要関連資料（中国）

①聖蹟圖[1]…元・王振鵬（孤雲）画、元・兪和（紫芝）題。民国・鄧實編『神州国光集増刊之二』（神州国光社、一九〇八年）所収。王振鵬は元朝に仕えた著名な宮廷絵師であり、他にも多くの絵画を残す（ただ当該『聖蹟図』の情報は極めて少ない）。兪和も同時の文人である。全十図の内容や張楷図賛への踏襲の仕方については後述する。これ以前、例えば南宋等にも先行資料の存在が予測されるが、確認していない。

②聖跡図…明・正統九年（一四四四）序刊。画像三十七図。鄭振鐸旧蔵－中国国家図書館蔵。『中国古代版画叢刊』（古典文学出版社、一九五八年）所収。包背装二冊。鮮明な木刻本の影印である。鄭振鐸は跋文で、この本をその後に続く諸本の原本とするが、加地伸行や佐藤一好はこの説を斥け、該本は「張楷の正統本を増補した何珣の弘治本系統の『聖蹟図』である」とする。[2] その論拠の一は『聖跡図』所収の張楷図賛の有無である（後述）。

③明版彩絵孔子聖蹟図…曲阜市文物管理委員会編、斉魯書社、二〇〇六年影刊。三十六図の彩絵絹本、高四一・四cm×寛六六・二cm。画者、絵製年は不詳。明弘治間（一四八八－一五〇五）製か。各絵に説明文と張楷の図賛を付すが、画題は無い。制作年は特定できない。一般には連環画式に影印した小冊子本が通行する。

④聖蹟図…清・顧沅撰、『聖廟祠典図考』（綫装書局、一九九六年影刊。原本は道光六年（一八二六）刊）所収。全六十八図。先行する元・兪和、明・張楷の図賛を襲用しつつ増多する。四字題を附した絵図と、説明文・図賛を載せる文字とを別頁に組む体裁を取る。この『孔子聖蹟図』がどのように明・張楷、または元・兪和の『孔子聖蹟図』賛を踏襲しているかについては別稿において考察したい。なお、『孔孟聖迹図』（綫装一函二冊、上海辞書出版社、二〇〇三年。中国古代木刻版画珍蔵佚本）は、原本を明記しないが、本書道光六年刊本の影印本である。

⑤聖蹟図賛旧碑…張楷の図賛のみ二十八首を輯録する。図は無い。清・孔毓圻（孔子子孫）等編『孔宅志』巻五所収。張楷の図賛に特定して考察しようとする拙稿には貴重な資料であり、底本とした。

⑥聖迹図一名**大成至聖文宣先師周流之図**…清・直隷宛平蘭友芳文、青浦陳尹絵、蘇州朱璧鐫。末尾に蘭友芳の識語がある。北京図書館出版社、二〇〇一年刊。曲阜孔廟の陰刻石刻三十四図を影印する。胡蝶装。沈津の前言に拠れば、康熙二十一年（一六八二）、上海青浦県知事であった蘭友芳が離任時に出資して鐫刻させたものという。各図に説明文と図賛を刻するが、図賛は蘭友芳作と思われ、その措辞表現に張楷図賛の踏襲は認め

られない。清初の美麗な石刻作品である。後出⑩**孔孟聖蹟図鑑**にも詳細な解説と訓読文を載せる。

以上、中国刊の主要資料について概括すれば以下のようである。

（一）確認できる限り、『孔子聖蹟図』の資料は元以降に出現する。

（二）明代以降に『孔子聖蹟図』が続出する。これには当時多数の作品が制作されたこと以外に、ほぼ四五百年を経て、大切に保存された原物資料が今日に伝承しているという思想的、物理的要因が考えられる。

（三）原物絵画は一点限りであるが、明代に発展する図像印刷によれば、複数の図像本の刊行が可能である。

（四）原物絵画に附する説明文や画賛等の文字資料も重要な原初資料でありながら、その文学史的研究はほとんど手が付けられていない。

（五）今日の中国における多数の『孔子聖蹟図』影刊本の出版は、現代における孔子・儒教の新たな見直しや印刷複製技術の発展に大いに関連するものと見られる。

なお、『孔子聖蹟図』が図賛を載録するか否かは、実は該本の伝播を考える上で大きな判断材料になるのだが、このことについては別稿において改めて考察したい。

『孔子聖蹟図』主要関連資料（日本）

以下は、拙稿に関わる日本側の主要資料についての解説である。

⑦**孔子聖蹟之図**…慶長十三年（一六〇八）嶋津家久跋刊。木刻画像四十幅。弘治丁巳（十年、一四九七）の原跋を附す鮮明な和刻本である。上記②の明本の流れを汲むか。原本の日本への伝来時期は不明だが、江戸初期（もしくはそれ以前）我が国に伝わった明本が薩摩において模写され、江戸初期に鮮明に和刻印刷されるという文

化水準の高さに驚かされる。嶋津家久跋に次のようにある。

此孔子聖蹟者、我曾祖父前相州刺史日新翁爲之屏障、置之座右、以備其観覧矣。予幸継其芳躅、將廣曾祖父業。因命畫師等林摹之以欲使家孫子仰聖跡於百千歳之後。

此の『孔子聖蹟（図）』は、我が曾祖父前の相州刺史日新翁（嶋津忠良）、之を屏障に為りて、之を座右に置き、以て其の観覧に備へたり。予 幸に其の芳躅を継ぎ、将に曾祖父の業を広めんとす。因て画師（日野）等林に命じて之を摹せしめ、以て家の孫子をして聖跡を百千歳の後に仰がしめんと欲するなり。(3)

ここには、嶋津家久が子孫教育の為に模写したという、『孔子聖蹟図』伝承に共通する重要なキーワードが記録される。なお、跋の後半に、家久はこの日野等林模写『孔子聖蹟図』を高野山（蓮金院）に寄進したと述べる。(4) 更に、鹿児島加世田市立郷土資料館蔵の**孔子聖蹟之図屏風**は、文政十三年（一八三〇）にこの原画を模写したものといわれる。(5)

⑧至聖文宣王…昭和九年（一九三四）、神戸又新日報。宇野哲人序、概説、及び中山久四郎巻頭言。内に原画の白黒写真三十九画幅、及び眉欄の説明文と図賛の訓読を附す。斯文会編、昭和十年大阪新日報社本等は、更に東京湯島聖堂沿革及び至聖先師孔子廟の説明を数葉の白黒写真と共に載せる。また巻末に張楷『聖蹟図跋』及び嶋津家久後記の原図写真と訓読文を附す。高二七㎝×寛三七、五㎝の横長大本に『孔子聖蹟之図』原画を白黒写真で影印する。上記⑦にも述べた原画（日野等林作。奥書に原版所有者小林音次郎とある）は、高野山から目黒雅叙園美術館所蔵後、同館閉館後の現在は所在不明である。

⑨孔子聖蹟志…馬場春吉編、大東文化協会、昭和八年（一九三三）。曲阜孔子廟及び関連する周辺の孔子聖蹟について、多数の白黒写真や図表と共に総合的に述べる。『聖蹟図』については一六九頁に画目と共に解説する。

山東曲阜が日本軍治下にあった情況下で刊行された該著は、孔子や儒教への尊崇畏敬の念が顕著である。

⑩孔孟聖蹟図鑑…馬場春吉編、同刊行会、昭和十五年（一九四〇）。徳富蘇峯・服部宇之吉・市村瓚次郎他の題字、及び井上哲次郎・宇野哲人・塩谷温他の序文を連ねた、高三五、五㎝×寛二八㎝×厚四㎝に及ぶ豪華本である。内容は題字序文・孔孟聖跡図（地図）に続き、［記事］［地図］［写真］に分けて述べる。［記事］は聖蹟図及び大成至聖文宣王先師周流図に就て・大成至聖孔子等の項目に分けて懇切に解説する。掲載写真も豊富であり、凡そ当時考え得る全ての参考写真を網羅して集大成した豪華本である。『聖蹟図』については、［記事］冒頭に解説する外、『大成至聖文宣先師周流之図』（上記⑥）を影印する。本書は、上記⑨に同じく、日中大戦下における国威発揚の為の刊行物と考えられる。なお内容を削略した海賊版『孔孟聖蹟図鑑』（韓国ソウル民俗苑、一九八二年）も相当に流通する。

⑪聖蹟図にみる孔子流浪の生涯と教え　孔子画伝…大阪大学教授（当時）加地伸行著、集英社、一九九一年。「はじめに」「『聖蹟図』という名の孔子画伝」「孔子とその時代と」に続き、上記③系統の版本を底本にして各絵を彩色影印し、それぞれに解説と訓読、関連資料の紹介を豊富な写真と共に加える。日本を代表する孔子及び儒教研究の碩学の手になる本書は内容の水準が高く、絵画や版本写真を駆使した視覚資料は説得力がある。特に附載する佐藤一好の論文「『聖蹟図』の歴史」は『聖蹟図』志と版本史について詳細であり、拙稿も多くを参照した。[6]

以上、日本側の関連資料のあらましについて見た。筆者の調査はまだ不十分であり、大学や研究機関が蔵する全ての関連資料の一斑を見たに過ぎないが、それでも凡その傾向は把握可能と思われる。則ち、

（一）　中国の明清期に盛行した『孔子聖蹟図』は、その他の一般中国書籍と同様、かなり早期に日本にもたら

され、和刻本の出版を見たこと。特に初期の薩摩嶋津家における文化活動は特筆すべきものであること。

（二）日中戦争下にあって、中国山東も戦場となったが、聖地曲阜における孔子関係遺跡は却ってかなり厳重に保護され、『孔子聖蹟図』を含む関連資料の調査研究が真摯に実施されたと認められること。[7]

（三）本稿では例示を省いたが、江戸期における『孔子聖蹟図』の絵入り本、仮名交じり文の各種国訳本の刊行は、中国明清期と同様に、当時における儒教の伝播、孔子像の普及に相当に貢献したと思われること。

三　張楷略伝

張楷の伝記紹介については、佐藤一好の論文「張楷の生涯と詩作と『聖蹟図』[6]」が詳しい。本章では、該論を参照しつつ、張楷の伝記の特色、特にその文学方面の特徴について筆者の初歩的理解を示しておきたい。

（一）その家系

張楷の父張惟哲も従父（おじ）も、当時「以能詩稱（詩を能くするを以て称せらる）」、つまり詩人として知られていた。詩作に身近な家庭環境は、本人が意識するとしないとに関わらず、張楷のその後の成長に大きな影響を及ぼしたであろう。本稿で考察する『孔子聖蹟図』図賛の成立にも直結すると考えられる。張惟哲の『聯璧集』が当時には有名であっても今日まで伝わらないのは、つまりはそれが抄本であって、まだ印刷刊行されていなかったことを意味する。明代中期には、個人文集の印刷出版は、まだ後世の明末や清代のようには一般的でなかった。それよりも、当時の墓誌銘・神道碑・行状類にこれらの詩文集目が記載されていること自体驚くべきである。

（二）幼少青年期と科挙進士合格

明の洪武三十一年（一三九八）に生まれた張楷は「少穎異、書一覧即成誦（少くして穎異、書は一覧すれば即ち誦を成す）」ほどの記憶力抜群の少年であった。恐らく上記の父や叔父がみっちり『詩経』朗誦等の蒙学を教え込んだ成果であろう。張家の栄誉を一身に背負った「穎異」な張楷少年は、やがて「「年十二能属文」（年十二にして能く文を属り）」、「年十四為邑庠生（年十四にして邑の庠生と為り）」、「十七中郷試（十七にして郷試に中り）」、遂に二十七歳で晴れて永楽二十二年（一四二四）の進士科に第三甲の成績で合格する。この間、本人の努力はもとより、もちろん周囲の全面的な援助があったであろうが、まずは張楷は順調な修学、そして進士合格であったと言える。

（三）その官途と政治業績

張楷の主要な官歴は次のようである。

宣徳二年（一四二七）、三十歳、兵部試政
宣徳四年（一四二九）、三十二歳、南京江西道監察御史
正統五年（一四四〇）、四十三歳、陝西按察使僉事
正統十三年（一四四八）、五十一歳、都察院右僉都御史
正統十四年（一四四九）、五十二歳、都察院右僉都御史を免職
（天順四年（一四六〇）、六十三歳、北京にて病没）

こうして官歴だけを羅列すると、張楷は官人として頗る順調な出世階段を踏んだかのように見える。事実、鄧

茂七の乱の平定に尽力したという実績はあるのだが、その経歴は決して順風満帆一辺倒ではない。そこには所謂詩禍による免職事件をも含んでいる。経緯の分析は佐藤論文に詳しいが、明・沈徳符『萬暦野獲編』巻二十五[8]によると、正統十四年、福建剿賊都御史として鄧茂七の乱の平定に当たった張楷が「除夕」詩に詠んだ、

庭院不須燒爆竹　庭院　爆竹を焼くを須ひず
四山烽火照人紅　四山の烽火　人を照らして紅なり

という詩句が、反乱軍鎮定の責任者として不適切であり、「寇を弄ぶ」として給事中の王詔に弾劾され、張楷は免職に至る。弾劾事件は不幸であるが、ここには、乱中にあってなお詩作に耽った詩人張楷の面目が躍如としている。佐藤論文も既に指摘するが、『孔子聖蹟図』に付す張楷の序文の識語に次のようにある。

時正統甲子秋七月望日、四明張楷式之盥手謹書于西臺公署

時に正統甲子（九年、一四四四）秋七月望日、四明の張楷式之、手を盥ぎ謹しんで西台の公署に書す。

時に張楷四十七歳、『孔子聖蹟図』が、陝西按察使僉事として西安公署の西台において成ったことは注目される。なお、明・呂原「南京都察院右僉都御史張公墓誌銘」（明・黄宗羲『明文海』巻四五〇所収）にも、張楷の著作として『孔子聖蹟圖賛』を明記する。

（四）記録に残った張楷の文学著作

『明史』巻九十九、芸文四二に、張楷の著作として次の記録がある。

張楷『和唐音』二十八巻、『和李杜詩』十二巻

現代の杜信孚・杜同書編『全明分省分縣刻書考』江蘇家刻[9]巻によると、

和李杜詩十二巻　明張楷撰。明成化（引用者注：一四六五～八七）江蘇省常熟縣劉効刊本
和杜詩六巻　明張楷撰。明天順二年（引用者注：一四五八）江蘇省常熟縣劉以則（引用者注：劉効字）刊本

とあり、張楷の晩年から没後にかけて、江蘇常熟の劉効（字は以則）がその『和李杜詩』『和杜詩』を刊行していることが分かる。同書に引く『和杜詩六巻』の張楷自序に次のようにある。

景泰間、余和李翰林珠玉詩、古樂府二百五十餘篇、杜少陵律詩二百五十首。既脱稿、天順己卯調官南臺。海虞劉以則來京、請爲余綉梓以傳…

景泰間（一四五〇～五六）、余、李翰林（白）の珠玉詩、古樂府二百五十餘篇、杜少陵（甫）の律詩二百五十首に和す。既に脱稿するに、天順己卯（三年、一四五九）調せられて南台に官す。海虞劉以則（効）、（北）京に来たり、余が為に綉梓（しゅうばん）して以て伝へんことを請ふ…

この張楷自序によると、張楷が李白や杜甫、古楽府に和した詩篇は、既に景泰間（一四五〇～五六）に脱稿していたが、天順三年（一四五九）、劉以則が転任先の北京までやって来て、原稿の出版を慫慂したという。これらの張楷の和詩は諸本によって巻数も異なり、今日研究機関等の所蔵の有無も不明であるが、少なくとも当時、張楷の李白・杜甫・古楽府の和詩の刊行が云々されていたという記録は重要である。

また、張楷の免職の事由の一に、彼が「「監軍」としての責務を忘れて詩作に耽っていたのみならず、建寧府に命じて自らの詩集を刊行させていた」という佐藤論文の指摘は同様に注目される。則ち、『明英宗実録』[10]巻一七八、正統十四年五月丙戌条に見える王詔の張楷弾劾文がその証拠である。

禮科給事中王詔言、福建盗賊生發、皇上命都督劉聚・僉都御史張楷統軍剿殺。各官自到建寧以来、笙歌為樂、笑傲自如。楷以平時所和唐詩逼令建寧府刊行、其於軍政置之度外。

礼科給事中王詔言す、「福建の盗賊生発するや、皇上都督劉聚・僉都御史張楷に命じ、軍を統べて剿殺せしむ。各官建寧に到りてより以来、笙歌して楽を為し、笑傲自如たり。（張）楷ごとき、平時和する所の唐詩を以て、逼りて建寧府をして刊行せしめんとし、其の軍政に於けるや之を度外に置けり。…」

弾劾文はこの後に、上述した「庭院不須燒爆竹　四山烽火照人紅」等の張楷の戦時下における作詩例を引く。要するに、張楷が反乱軍平定の任務を疎かにして作詩に耽り、自作の『和唐詩』を建寧府から公刊するように逼ったという告訴である。公金の私的不正使用が弾劾されたということか。明代中期に出版の聖地として声名があった福建建寧に反乱軍の鎮圧のために赴いた張楷が、職務を疎かにして自編の和唐詩の刊行を画策したというエピソードは注目される。結果として張楷が免職されたことからすると、この時の張楷『和唐詩』の建寧出版は実現しなかったと思われる。

清・黄虞稷の『千頃堂書目』巻十八には、張楷の著作として以下の書名を掲げる。

『陝西紀行集』『輕侯集』『介庵集』『歸田錄』『南臺稿』『百琴操』『效顰稿』『和選詩』『和李謫仙・樂府・古詩・杜少陵七言律十二卷』『和唐詩正音二十八卷』『和許渾丁卯集』『和高季迪缶鳴集』『和中峰和尚梅花百詠』

この他にも張楷の作品集として、『草堂詩餘』『四經糠粃』『大明律條撮要』『武經小學』『増廣事物紀原』（以上、呂原「南京都察院右僉都御史張公墓誌銘」）、『介庵集』（『明代版刻綜録』巻六）、『瀛奎（律髓）』『三体（詩）』（以上、『列朝詩集小伝』『明詩綜』）等の多数の書名を記録する。書名から判断する限り、詩文集の外に、和詩や抜粋書が多いが、残念ながらいずれも完本としての今日への伝存は確認できない。恐らくは抄本のままで保存され、刊行には至らなかったものと思われる。

そういう中にあって、張楷作の『孔子聖蹟図』賛や『蒲東崔張珠玉詩集』[11]が辛うじて今日に伝えられているのは、張楷の作品が、孔子や『西廂記』という大名の驥尾に付して印刷刊行されることによって辛うじて今日に伝わったものと考えられ、彼の文学活動、又は明代中期の文檀のあり方を考える上で貴重な資料となるものである。

四　元・兪和『孔子聖蹟図』賛と明・張楷『孔子聖蹟図』賛

張楷作の『孔子聖蹟圖』賛二十九首は、概ね清・孔毓圻等編『孔宅志』巻五所収「聖蹟圖賛舊碑」二十八首に対応すると考えられるが、本稿では、そのうち、先行する『孔子聖蹟図』の元・兪和賛に重複する十首を以下に掲げる（訓読は張楷賛に基く。番号は後掲図に対応する）。

①ａ　元・兪和賛…尼山巖巖　魯邦是瞻　降靈自母　孕聖歸男　既驗以形　遂徵以名　一誠感格　萬古文明

①ｂ　明・張楷賛…**尼山禱嗣**（尼山に嗣を祷る）

尼山巖巖　魯邦是瞻　降靈自母　孕聖歸男　既驗以形　遂徵以名　一誠感格　萬古文明

（尼山は巖巖として　魯邦　是れ瞻る　靈を降すこと母自りし　聖を孕むこと男に帰す

既に験するに形を以てし　遂に徵するに名を以てす　一誠もて感格し　万古文明なり）

②ａ　元・兪和賛…望魯相聖　強齊畏威　用夷遏夏　女樂乃歸　邪逐正移　始難終保　邈矣聖蹟　厄哉吾道

②ｂ　明・張楷賛…**受樂遄行**[12]（学を受け遄に行る）

望魯相聖　強齊畏威　女樂文駟　以沮其爲　周道游觀　不理政事　弁冕而行　膰俎不致

（望ある魯　聖を相とすれば　強き斉　威を畏る　女楽と文ある駟　以て其の為を沮まんとす（魯は）周道游観し　政事を理めず（孔子は）弁冕して行り　膰俎致けられず）

③a　元・兪和賛…貨暴於匡　聖状偶同　彼方此讎　我適此逢　鳳異梟群　麟殊兕跡　匪伊其昏　惟聖斯厄

③b　明・張楷賛…**圍匡曲解**（匡に囲まれ　曲解さる）

虎暴於匡　聖貌偶同　彼方此仇　我適與逢　鳳異梟音　麟殊兕跡　匪伊其昏　惟聖斯厄

（陽）虎　匡に暴たり　聖貌偶ま同じ　彼れ方に此に仇せんとするに　我れ適ま与に逢へり　鳳は梟音に異なり　麟は兕跡を殊にす　伊れ其れ昏きに匪ず　惟だ聖　斯に厄せり）

④a　元・兪和賛…出自東門　顧瞻徘徊　彼二三子　云何不來　鄙哉鄭人　能識聖容　既異其狀　復哀其窮

④b　明・張楷賛…**東門貽誚**（東門に誚を貽らる）

出自東門　顧瞻徘徊　彼二三子　云何不來　鄙哉鄭人　能識聖容　既異其狀　復憫其窮

（孔子）出づること東門よりし　顧瞻して徘徊す　彼の二三子　云何ぞ来らざる　鄙なるかな鄭人　能く聖容を識る　既に其の状を異しみ　復た其の窮を憫れむ）

⑤a　元・兪和賛…聖無不知　奚襄是師　曰取其專　以探乃微　得志得數　復得其人　聲入心通　大哉聖人

⑤b　明・張楷賛…**學琴師襄**（琴を師襄に学ぶ）

聖無不知　奚襄足師　曰取其專　以探廼微　得數得志　復得其人　聲入心通　大哉聖神

（聖は知らざること無し　奚ぞ襄　師とするに足らん　曰に其の專を取り　以て廼の微を探るなり　数を得　志を得　復た其の人を得たり　声入り　心通ず　大なる哉　聖神）

⑥a　元・兪和賛…我西我轅　将見簡子　至河而反　為傷賢士　覆巣鳳遠　諱傷其倫　物類尚然　何況聖人

⑥b　明・張楷賛…**臨河返駕**（河に臨みて駕を返す）

我西我轅　將見簡子　至河而反　爲傷賢士　覆巣　鳳遠　諱傷其倫　物類尚然　何況聖人

（我れ我が轅を西して　将に（趙）簡子に見えんとするも　河に至りて反るは　賢士を傷む

が為なり　巣覆れば鳳遠る　其の倫を傷ふを諱めばなり　物類すら尚ほ然り　何ぞ況ん

や聖人をや）

⑦a　元・俞和賛…齊封尼谿　晏嬰拒之　楚封書社　子西沮之　茫々列國　竟誰與之　待價而沽　肯輕許之

⑦b　明・張楷賛…**楚封見沮**（楚に封ぜられんとして沮まる）

齊封尼谿　晏嬰拒之　楚封書社　子西沮之　茫茫列國　竟誰與之　待價而沽　肯輕處之

（斉（孔子を）尼谿に封ぜんとするや　晏嬰　之を拒み　楚（孔子を）書社に封ぜんとする

や　子西　之を沮む　茫茫たる列国　竟に誰か之と与にせん　価を待ちて沽らんや　肯て

軽しく之に処らんや）

⑧a　元・俞和賛…轍環天下　道不可行　曰帰乎来　脩我典刑　三千従遊　七十高弟　刪述六經　垂憲萬世

⑧b　明・張楷賛…**刪述六經**（六経を刪述す）

轍環天下　道不可行　曰歸乎來　脩我典型　三千從遊　七十高弟　刪述六經　垂憲萬世[13]

（轍は天下を環るも　道は行ふべからず　曰く　帰りなん乎来我が典型を脩めんと

（弟子）三千従遊し　七十の高弟あり　六経を刪述して　憲を万世に垂る）

⑨a　元・俞和賛…王降而伯　雅亡而風　麟出斃矣　吾道其窮　既歌以哀　復史以彰　非徒物感　實為世傷

⑨b　明・張楷賛…**西狩泣麟**（西に狩りて麟に泣く）

王降而覇　雅亡而風　麟出斃矣　吾道其窮　既歌以哀　復史以彰　匪徒物感　實爲世傷

（王は降りて覇となり　雅は亡びて風となる　麟出でて斃（たお）れたり　吾が道其れ窮せり　既に歌ひて以て哀しみ　史に復して以て彰はす　徒（ただ）に物に感ずるのみに匪（あら）ず　実に世を傷むが為なり）

⑩ａ　元・俞和賛…穆々廟庭　聖徳斯尊　粛々衣冠　聖澤斯存　漢祖崇儒　躬拝闕里　太牢之祠　百代伊始

⑩ｂ　明・張楷賛…漢高崇祀（漢高（祖）崇（たつと）び祀（まつ）る）

穆穆廟庭　聖徳斯尊　粛粛衣冠　聖澤斯存　漢祖崇儒　躬拝闕里　太牢之祠　百代伊始

（穆穆たる廟庭　聖徳斯れ尊し　粛粛たる衣冠　聖沢斯れ存す　漢（高）祖は儒を崇び　躬（みずか）ら闕里に拝す　太牢の祠　百代なるは伊より始む）

以上は、張楷の『孔子聖蹟図』賛二十八首のうち、先行する元・俞和の『孔子聖蹟図』賛と重複する十首の図賛である**（末尾に、対応する十図を比較して掲げる）**。本来ならば各絵図についての個別内容の説明をすることが望ましいが、紙幅の関係もあり、ここでは、孔子の生涯の実蹟を連環画風に描いたものであることだけを確認しておく。一目すれば、以下の事実が瞭然となるであろう。

一　孔子を絶対至高の「聖」人として表現しており、元明期における孔子尊崇の実態が如実に窺われること。

二　ここに掲げた張楷の『孔子聖蹟図』賛十首は、殆ど全てが先行する元・俞和の『孔子聖蹟図』賛を踏襲し、または模擬した表現となっていること。

三　張楷『孔子聖蹟図』の図像（絵者不詳）もまた、明らかに先行する元・王振鵬の図像を模していること。

なお、拙稿では引用と分析を控えたが、『孔子聖蹟図』に図賛と共に引用される説明文もまた、実は『論語』や『中庸』、『孔子家語』や『史記』孔子世家等の関連書物から抜粋した記事から構成されているものが大多数である。『孔子聖蹟図』にとって主体はあくまでも絵図であり、図賛や説明文は附属物でしかないが、それにしても張楷が先行する兪和の図賛をこれほど忠実に引用する実態を眼前にすれば、我々は単なる張楷個人の趣向ではない、明代文壇の趨勢がその背景に存在し、作用していることを想定しないわけにはいかない。

五　まとめ ―張楷の図賛と明代の抄録模擬文学

明代文学がその自由闊達な文風を評価される一方、しばしば古人の詩文（特に秦漢・盛唐のそれ）の皮相な模擬踏襲に終始した欠点については、後世の論者によって繰り返し指摘される。その批判の的となるのは主に李・王（李攀龍・王世貞）が領導する後七子であり、より広義には李・何（李夢陽・何景明）率いる前七子も含まれる。今、このことを明言する論著を挙げれば、例えば初期の『中国文学史』著作である古城貞吉『支那文学史』[14]では、

李王の詩は摸剽竊の四字に出てず、其の古人に摸するもの似るは則ち似るあるも、畢竟造れる花の其の形ありてその香なきか如く、以て人の肺腑に入ること難きと爲す、

と述べて、造花の如く形を似せて香が無い後七子の詩風を批判する。近くは、吉川幸次郎『元明詩概説』[15]「「古文辞」の功罪」が、その罪過を以下の五点に集約する。

第一、典型との密着をもって、文学の方法とする主張は、文学を、単なる模倣に終わらせた。第二、模倣、贋作としても、成功でない。第三、典型の選択が、過去の文学のうち、「秦漢の文」「盛唐の詩」と、もっぱ

ら強烈を特徴とするものに、局限され、終始する結果、過去の文学の、優雅なもの、精緻なもの、の祖述は、すべて没却されている。第四、典型の固定が、単調な千篇一律となる。第五、古典への密着が、十六世紀の現実の反映をおろそかにする。

一方、中国での顕著な指摘としては、劉大杰が『中国文学発展史』[16]下巻一一〇頁に次のように述べている。

他們反台閣、講学問、確実是有功的、講秦漢盛唐也並不錯。不過他們要学的不是秦漢盛唐文学的思想内容、而只是句摸字擬的形式技巧、結果完全走上捨本逐末的形式主義的道路。（彼ら（引用者注：前七子）が台閣体の詩風に反対して学問を主張したのは確かに功績があり、秦漢盛唐の文学を重視するのも間違いではない。しかし、彼らが学ぼうとしたのは秦漢盛唐文学の思想的内容ではなく、一字一句を摸擬する形式的な技巧のみであった。その結果、完全に本末を顛倒して形式主義に走ってしまったのである。）

以上の指摘指弾は専ら前後七子による明代詩文についてのものだが、明代に一世を風靡した戯曲小説についても前作の模擬襲用が顕著であったことについては、欧陽健「《隋唐演義》"綴集成帙"考」[17]が詳細に解明するほか、拙稿「『驚鴻記』を襲用した『隋唐演義』の梅妃故事について」[18]においても論及した。

明の洪武三十一年（一三九八）に生まれ、永楽－宣徳－正統－景泰年間を経て、天順四年（一四六〇）年に六十三歳で没した張楷は、前七子文人が活躍した弘治－正徳年間（一四八八－一五二一）の前夜に当たる。時代上は張楷が前七子に直接関わることはないが、本論において検討したように、模擬襲用の風潮が色濃い張楷の『孔子聖蹟図』賛の詩風は、前七子の詩風に直結するものと考えてさしつかえないであろう。

即ち、佐藤論文「張楷の生涯と詩作と『聖蹟図』[6]」が既に銭謙益『列朝詩集』や朱彝尊『明詩綜』に収める張楷詩評を引用して指摘するように、張楷詩作の「模倣的である」という特徴は、ひとり張楷だけの特徴のみなら

ず、前七子に直結する明代前期詩壇全般に蔓延する風潮として把握すべきである。[19]

残念ながら、張楷の詩文の多くは今日に伝存しないが、明代に盛行した『孔子聖蹟図』に付載する図賛の分析からも、張楷詩が前人の作品を踏襲して「模倣的である」という特徴は、そのまま裏付けられるであろう。

人は多分に時代の子である。従来、個人の性格として、放埒なり、几帳面なり、英雄的なり、好色的なり、個人の特徴と考えられてきた特性も、よくよく分析すれば当時の時代背景によって修飾され、醸成されたものも多い。佐藤氏が指摘し、拙稿の『孔子聖蹟図』賛でも証明された張楷の「模倣的である」という特徴についても、直接には張楷個人の性格に起因するものであろうが、一方で、その背景にあった「模倣踏襲」を当然のこととする当時の時代思潮が直接間接に作用したとも考えるべきである。

注

(1) 該書について、宮紀子氏、佐藤一好氏のご配慮を得た。拙稿末尾に佐藤氏蔵本の書影を載せる。王振鵬『孔子聖蹟図』について、宮紀子『モンゴル時代の出版文化』(名古屋大学出版会、二〇〇六年)に論及する。

(2) 加地伸行『聖蹟図にみる孔子流浪の生涯と教え　孔子画伝』(集英社、一九九一年)所収の佐藤一好「『聖蹟図』の歴史」参照。

(3) 原文の異体字、訓読等を改めた所がある。訓読の（　）内は筆者注。

(4) 山西健夫氏によると、高野山蓮金院に寄進された『孔子聖蹟図』は目黒雅叙園美術館所蔵の由である(春苑堂出版、平成十年『薩摩の絵師たち』所収「江戸時代の絵画」。また鹿児島市立美術館、一九九六年『かごしま 美の先人たち』)所収「鹿児島の近世絵画」)。ただ目黒雅叙園美術館は今日閉館しており、『孔子聖蹟図』は確認できない。以上、井手誠之輔、福田善子、東英寿の各氏から情報の呈示に与った。記して謝する。因みに、伊地知季安『漢学起源』巻三、南浦第三十六に次の記事がある。

初日新君得聖蹟図製為屏障、恒置座右以備觀戒矣。乃孔子終身之履歷、而明張楷所賛也。(初め日新君(嶋津忠良)、『聖蹟図』

を得て製して屏障と為し、恒に座右に置きて以て觀戒に備えたり。乃ち孔子終身の履歴にして、明の張楷の賛する所なり。）和刻本では「観覧に備ふ」とするのを、『漢学起源』巻三南浦第三十六では「観戒に備ふ」とする等の表現の違いはあるが、この文はほぼ⑰『孔子聖蹟之図』の嶋津家久跋文と同様である。そのことから、伊藤慎吾論文（次注（5））は嶋津家久の跋文も南浦則ち文之玄昌作になると推定する。

（5）伊藤慎吾「文之玄昌と『聖蹟図』」（『國語國文』七十二巻七号（八二七号）、京都大学国語学国文学研究室、平成十五年）注（七）参照。該論文は「文之を『聖蹟図』の本文書写の役として考えることは順当な見方」と述べ（二五頁）、「慶長期、薩摩藩では孔子の生涯を描いた『聖蹟図』をめぐって藩主と儒僧文之玄昌との間で文化活動が見られた。これは京をはじめとする他地域には見られぬ独自の動向であった。」と総括する（二九頁）。

（6）関連論著として、上記影刊本等に付された前言、序文、付載論文等の外に以下のものがある（多くは佐藤一好氏の示教による。中文表記は常用漢字を用いた）。

佐藤一好「張楷の生涯と詩作と『聖蹟図』」（大阪教育大学『学大国文』三四、一九九一年）

佐藤一好「『聖蹟図』研究ノート」（大阪教育大学『日本アジア言語文化コース彙報』三、一九九五年）

伊藤慎吾「文之玄昌と『聖蹟図』」（『國語國文』七十二巻七号（八二七号）、京都大学国語学国文学研究室、平成十五年

王裕昌「《孔子聖迹図》賞析」（『図書与情報』甘粛省図書館、二〇〇四年六期）

沈津「《聖跡図》版本初探」（沈津書目文献論集『書韵悠悠一脈香』広西師範大学出版社、二〇〇六年所収）

李雲「孔子〝聖迹図〟絵刻与収蔵初探―記北京大学図書館蔵〝聖迹図〟」（『長沙大学学報』二〇〇五年一期）

文宜「第三届全国《孔子聖迹図》創作理論与実践研討会紀要」（『文芸研究』二〇〇六年二期）

孔祥勝・上官茂峰「《聖迹之図》考析」（栄宝斎、二〇〇六年三期）

中国の論文は今のところ『孔子聖蹟図』版本の紹介が中心となっているようであるが、拙論のように張楷の図賛について明代文学史上の観点から考察した論考は、管見の限りでは見当たらない。この他に最近の韓国側資料として次のものがある。

趙善美「孔子聖蹟図考」（『美術資料』六〇、国立中央博物館、一九九八年）

『孔子聖蹟図』（成均館大学校博物館。二〇〇九年。「絵で見る孔子の生涯」展の図録。

（7）日中戦争は日本軍による中国への侵略戦争であったが、その渦中にあって、日本側の儒教精神の聖地であった山東曲阜は日本軍によって手厚く保護された。今日の曲阜孔林の石碑破壊の多くは一九六〇―七〇年代の内乱たる文化大革命時の所業である。

（8）また清・銭謙益『列朝詩集小伝』乙集、清・朱彝尊『静志居詩話』巻六、清・陳田『明詩紀事』等に等しく引く。

（9）綫装書局、二〇〇一年。なお、杜信孚編『明代版刻綜録』巻六にも次の記録がある。

和李杜詩十三巻　明張楷撰　明成化劉傚刊　張楷、字式之、慈谿人。永樂二十二年進士。有介庵集。

（10）台湾中央研究院歴史語言研究所校、中文出版社、一九六二年序影刊。

（11）和刻本（内閣文庫所蔵）では、第百十五「法本送張生」詩を欠いた百四十首を刻する。なお、『西廂記』の早期の明版『新刊大字魁本全相叅訂奇妙註釋西廂記』所収の『蒲東崔張珠玉詩集』にも該詩を載録するが、作者名を明記しない。

（12）この図賛は、明正統九年（一四四四）序刊『聖跡図』及び慶長十三年（一六〇八）嶋津家久跋刊『孔子聖蹟之圖』系統本では「因膳去魯」と題し、以下のように表現が異なる。この表現は元・兪和『孔子聖蹟図』賛と全く同一である。

望魯相聖　強齊畏威　用夷遏夏　女樂乃歸（望ある魯　聖を相とすれば　強き斉　威を畏る　夷を用て夏を遏めんとし　女楽を乃ち帰る）

邪遂正移　始難終保　逖矣聖跡　厄哉吾道（邪は遂げ　正は移る　始め難く　終は保し逖かなるかな聖跡　厄せるかな吾が道）

（13）明・陳鳳梧（一四七五～一五四一）の「至聖先師孔子」賛にも「道冠古今　徳配天地　刪述六經　垂憲萬世」（道は古今に冠し　徳は天地に配す　六経を刪述し　憲を万世に垂る）とある。しかし、元・兪和『孔子聖蹟図』賛にも「刪述六經　垂憲萬世」とあることからすれば、やや時代が早い明・張楷（一三九八～一四六〇）の『孔子聖蹟図』賛が、元・兪和のそれを踏襲したことが考えられる。

（14）経済雑誌社、明治三十年（一八九七）刊。

（15）岩波書店、『中国詩人選集二集』、昭和三十八年（一九六三）。

（16）古典文学出版社、一九五八年。

（17）同氏『明清小説新考』（中国文聯出版公司、一九九二年）所収。

（18）拙著『楊貴妃文学史研究』（研文出版、二〇〇三年）所収。

(19) 清・顧沅の「聖蹟図賛」(『聖廟祀典図考』附)も、先行する明・張楷や元・兪和の図賛表現を夥しく踏襲する(このことについては別稿において改めて考察したい)。また明清期の通俗文学(特に戯曲小説)において、先行する作品の表現を無断で広範囲にわたって踏襲する現象については、拙著(注18)においても考察した通りである。してみれば、ここに言う張楷の「前作の模擬踏襲」も明代文学だけの特徴ではなく、中国近世文学、ひいては中国文学史全般に蔓延する現象であるとも考えられるが、本稿では、全体中の個別具体例、明代文学の一特徴として分析した。

(※) 本稿では、専ら『孔子聖蹟図』における図賛について考察したが、『孔子聖蹟図』は絵図と説明文と図賛とから成る。このうち説明文については、その多くが『史記』孔子世家、『論語』、『孔子家語』等からの抜き書きであり、図賛における模倣踏襲と軌を一にする。実は絵図についても、構図の酷似等によって前作の模擬踏襲は推定できるが、元・兪和図賛の『孔子聖蹟図』の絵師は王振鵬であることは分かっても、明・張楷図賛の『孔子聖蹟図』の絵師についてはあいにく不詳である。絵師と絵図の考察は今後の課題である。

以下に、本稿で考察した元・兪和図賛、王振鵬絵図の『孔子聖蹟図』十幅、及びこれに対応する明・張楷図賛の『孔子聖蹟図』の図像を対比して掲げる。出拠は、元・兪和図賛=王振鵬絵図のものは『聖蹟図』(『神州国光集増刊之二』神州国光社、一九〇八年。佐藤一好氏所蔵。本稿二章①)、明・張楷図賛のものは、絵画は『聖蹟之図』(山東省曲阜市文物管理委員会、一九九九年重印。本稿二章③の小冊子版、説明文の画題は⑤「聖蹟図賛旧碑」による。)。但し第十七「東門貽誚」図は底本に欠くため、明・正統九年序刊『聖跡図』(本稿二章②)より補った。拙稿では考証分析を省いたが、図賛のみならず、図像構成もまた前作のそれを踏襲していることが一目瞭然である。

①a　元・兪和『孔子聖蹟図』図賛

①b　明・張楷『孔子聖蹟図』図賛　尼山禱嗣

（図賛は「二龍五老」図中に転記する。）

元王孟雲寫俞紫芝臨聖蹟圖十幅之二

②a　元・俞和『孔子聖蹟図』図賛

②b　明・張楷『孔子聖蹟図』図賛　受樂遄行

元王孤岡寫兪紫芝題鄒魯圖十幅之三

③a　元・兪和『孔子聖蹟図』図賛

③b　明・張楷『孔子聖蹟図』図賛　圍匡曲解

元王孫雲寫俞紫芝題聖蹟圖十幅之四

④a　元・俞和『孔子聖蹟図』図賛

④b　明・張楷『孔子聖蹟図』図賛　東門貽誚

⑤a　元・兪和『孔子聖蹟図』図賛

⑤b　明・張楷『孔子聖蹟図』図賛　學琴師襄

⑥a　元・兪和『孔子聖蹟図』図賛

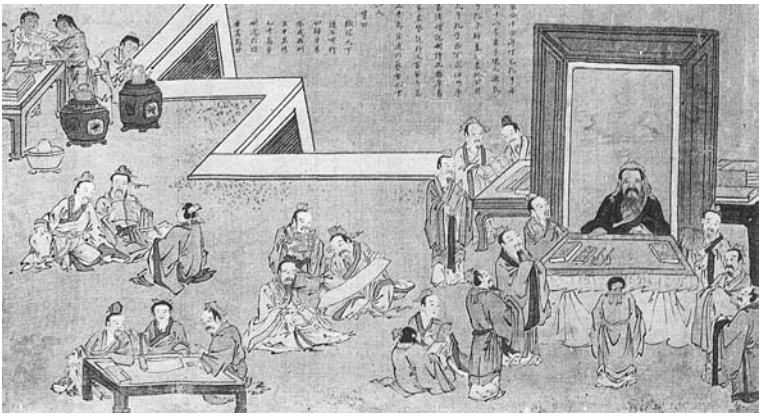
⑥b　明・張楷『孔子聖蹟図』図賛　臨河返駕

⑦a　元・俞和『孔子聖蹟図』図賛

⑦b　明・張楷『孔子聖蹟図』図賛　楚封見沮

元王孫霊寫徐紫芝臨聖蹟圖十幀之八

⑧a　元・徐和『孔子聖蹟図』図賛

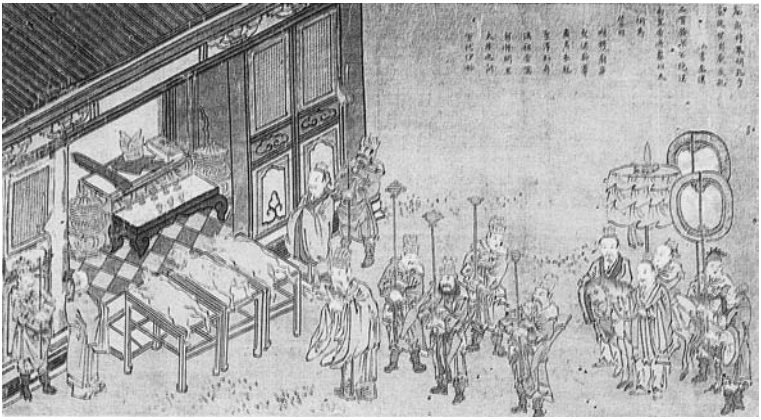


⑧b　明・張楷『孔子聖蹟図』図賛　刪述六經

⑨a　元・兪和『孔子聖蹟図』図賛

⑨b　明・張楷『孔子聖蹟図』図賛　西狩泣麟

⑩a　元・兪和『孔子聖蹟図』図賛



⑩b　明・張楷『孔子聖蹟図』図賛　漢高崇祀